In April 2022, Osaka City University and Osaka Prefecture University marge to Osaka Metropolitan University

Title	(コラム 1)寄せ場の変容 ： 早朝手配・収容型手配・登録型手配
Author	水野 阿修羅
Citation	URP「先端的都市研究」シリーズ. 33 巻, p.65-77.
Published	2022-03-15
ISBN	978-4-904010-48-8
Type	Book Part
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学都市研究プラザ
Description	外国人・寮付き派遣労働者の地域生活を支える社会的インフラ ： コミュニティハブ概念の構築
DOI	10.24544/ocu.20220516-023

Placed on: Osaka City University

Osaka Metropolitan University

コラム１

寄せ場の変容
早朝手配・収容型手配・登録型手配

水野 阿修羅

１．巨大飯場チェーンの出現

2019 年 3 月、西成労働福祉センターとあいりん職安が建て替えのため南海電車のガード下に移転した。大阪府は元の場所にもどすと言っているが、その規模や内容は全く発表していない。それ以上に問題は、労働者があいりん労働センターに集まってこないことであろう。昨年から仕事が増えて求人業者がセンターにたくさん来ているのに、労働者が集まってこなくて業者が困っている。

2011 年の東北大震災で私は「ホームレス支援全国ネットワーク」の呼びかけに応じて 6 月に仙台に支援に行った。そしたら東北自動車道の仙台インターチェンジのそばに大阪の人夫出しの「渥美組」がどでかい看板を出しているのに気付いた。そこで仙台駅の求人情報誌をみるとビックリ！渥美組が 1,000 人の復興支援作業員を募集している。更に大阪の業者が何社も求人募集をだしているではないか。みんな宿舎を用意しているとのこと。ほかにも全国から業者が来ていることが分かった。ホームレス全国ネットは大きな資材倉庫を持ち、九州の生協の車を何台ももち支援物資を各地に配達していた。私はその仕事にボランティアで参加していたので、車が自由に使えたので、この求人業者の宿舎を調べることにした。渥美組は大きな会社のビルを改造して宿舎にしていた。新成開発はワンルームマンションを宿舎にしていた。

仙台でホームレスに炊出しをしているグループから渥美組で賃金不払いがあると聞いたので渥美組の飯場に行ってみた。入ってみてビックリ、中にコンビニエンスストアがある。近所に何の店もないので作ったようだ。賃金不払いは私たちが大阪釜ヶ崎から来たというと、責任者が「本人が黙って辞めたので、不払いとは違う、いつでも本人に払う」といった。

8月にまたボランティアに行った。すると大阪からきた業者以外の全国からの業者の大半がいなくなっていた。やはり大量の労働者を宿泊させて管理するのは簡単なことではない。関西の業者は釜ヶ崎で労働組合ともめながら、大量の労働者を管理する力をつけてきたことがわかった。そこでひょっとしたら東京でもあるのではないかとネットで検索すると渥美組が関東一円で数カ所の飯場を経営していることがわかった。そこで東京のスポーツ新聞と求人情報誌を調べてみた。すると渥美組以外にも「神明」「バイセップス」「三共開発」といった関西の大手飯場チェーンが東京に進出していることがわかった。むろん東京の大手飯場チェーンも飯場を増やしていることがわかった。

東京の山谷が寄せ場としてほとんど機能しにくくなって、労働者はどこにいるのだろう？という疑問が私にはずっとあった。飯場がどんどん増えている。これはどういうことなのか？

労働者手配が寄せ場経由から新聞・雑誌・携帯求人になり、飯場経由か携帯経由になっている。携帯経由は私には調べられないので飯場を調べることにした。

とりあえず関西からの飯場進出を調べることにした。

・「渥美組」のホームページで東京の飯場の住所がわかったので行ってみることにした。「池袋の東京本部」はワンルームマンションを買い上げたようで、8階建てである。「相模大野」はどこかの大学か会社の寮を買い上げたようで外から部屋数を数えると200室ほどあるようでビックリした。一階には大食堂もある。駅から遠くて近所にコンビニもないので、中にコンビニを作るので従業員募集のビラが貼ってあった。「津田沼」はファミリーマンション3棟に食堂棟や事務所棟もあり敷地も広かった。こんな感じで関東一円に飯場が

12 カ所、事務所が 15 カ所。創業は 1951 年で、全国に飯場は 20 カ所。大阪の本部は西成区の飛田にある。
・「神明」（1953 年創業、全国に飯場 13 カ所）は横浜に 2 階建てが 3 棟ある元どこかの寮、埼玉にマンション 1 棟を飯場にして、営業所を 5 カ所作っていた。大阪の本部は西成区北津守にある。
・求人情報誌とスポーツニッポンを見ると、他にもあった。バイセップス（2001 年創業、全国に飯場 13 カ所、本部は大阪・梅田）が 4 カ所、三共開発（1983 年創業、全国に飯場 8 カ所、本部は大阪・梅田）が 4 カ所。いずれも新築である。

関東の飯場チェーンもスポニチに求人を出している。合わせて調べることにした。
・「林間」（1972 年創業、本部・大和市）は関東一円に 13 カ所。林間グループの「林間開発」は 6 カ所、「コクエー」（1989 年創業、本部・伊勢原市）は 6 カ所。
・「マルソ」（2006 年創業、本部・高田馬場、警備業「バロン」）は 10 カ所。
・「地商」（1974 年創業、本部・千葉市）飯場 7 カ所。
・「光営」（1976 年創業、本部・千葉市）飯場 9 カ所。
・ウィリング（2002 年創業、本部高田馬場）飯場 10 カ所。
・「長沼組」（1987 年創業、本部・横浜市）飯場 10 カ所。

関西のように飯場が集中しているエリアはない。都心にあるのは「渥美組」だけであり、ほとんどが国道 16 号線沿いに立地している、車で手配するので道路事情の良いところに分散させているのだろう。土地代とか建設費が安いというのもあるであろう。

かつての寄せ場だった高田馬場に人夫出し業者が 5 カ所も事務所を構えている。渥美組と神明は山手線をはさんで背中合わせにあるが、どこの事務所も早朝に行っても開いていない。登録手配するウィリングだけが事務所が開いて、職員が詰めていたが労働者はいなかった。手配が携帯でおこなわれ、賃金支払いと登録手続きのためにだけ存在するようだ。

渥美組、神明、バイセップス、三共開発以外の関西飯場チェーンは以下のとおりである。

・創新（1975 年創業、飯場・関西 8 カ所、本部・堺）。
・創新工業（1985 年創業、建設飯場 11 カ所、派遣飯場 4 カ所、本部・門真市）。
・新成開発（1988 年創業、飯場・7 カ所、本部・茨木市、仙台にも飯場あり）。
・北斗（1988 年創業、飯場・8 カ所、本部・枚方市）

渥美組とバイセップスは 2019 年警備業開始。創新工業は建設飯場と派遣飯場を別の建物にしているが、神明などは、派遣も同じ飯場から送りだしている。

２．収容型派遣の歴史

こういった収容型派遣の歴史は古い。

江戸時代は「桂庵」とか「口入れ屋」とか呼ばれて、宿舎を提供し、仕事を斡旋していた。

人集めの大変な、しんどい仕事は、宿舎を用意することで、住居を失った人を囲い込める。炭鉱がその一つの典型だろう。当然過酷な労働に逃げだす人は後を絶たず、逃亡防止装置として、労務管理者として暴力団が出てくる。のちにタコ部屋と呼ばれるものである。

八幡に製鉄所ができるときも、同じく人集めに苦労した業者は宿舎を用意した。「労働下宿」は暴力団の資金稼ぎの場になった。1910 年に日本に植民地化された朝鮮の農民は仕事を求めて来日し、こうした宿舎付きの仕事に就くことが多かった。そのうち彼らの中から宿舎＝飯場を経営する者もでてくる。これが、関西で飯場経営者に在日コリアンが多い理由の一つになっている。特に大阪市港区は戦前に済州島から直接船が着くため大量の飯場が出来て、経営者の多くが朝鮮人だった。そして隣り合う大正区、此花区、西淀川区に飯場が広がっていった。

戦争が終了し、米軍がやってきて、この封建的労働組織＝暴力団飯場をつぶすため GHQ 通達で「人夫出し禁止」が出された。ここでいったん人夫出しは無くなったと思われる。

今釜ヶ崎に来ている大手飯場の大半は大正区がルーツだが、戦前の飯場とのつながりが無い。大正区には戦前 1 万人以上の朝鮮人がいたが大半は帰国した。一方で生野区の朝鮮人は済州島出身が多かったので帰国しても仕事が無いのと、帰ってから舞い戻った人が多いのが大正区や此花区との主な違いである。朝鮮戦争が始まると日本は後方基地として急に忙しくなり人手がいるようになり、人夫出しが復活容認されるようになった。大正区には廃品回収業者が多く、彼らが宿舎を持っていたので人夫出しになったようだ。

姫路に大型工業地帯を作った時、労働者を全国から集めるため宿舎が用意され、その管理を山口組系の暴力団が担ったため、最悪の飯場管理がなされた。大型飯場も多かったので、大量の労働者を管理するスキルもここで育ったとも言われている。関東では神奈川と千葉に暴力団飯場が多いと言われていた。1980 年代のバブル期はこの悪評高い千葉の飯場が人が集まらず、成田空港があるので、外国人労働者が集中した。待遇も悪かったが滞在資格を持たない彼らはこうしたところでしか働けなかった。

同じように人集めに苦労した北海道でも「タコ部屋」と呼ばれた飯場が多かった。江戸時代からの和人による圧制と搾取でアイヌの人々は労働力として計上されないほど減少し、北海道の道路の多くは和人囚人が作ったと言われている。『鎖塚』（小池喜考著岩波書店）に詳しい。日本中から上手い口車に騙された人たちが逃げられないようにされた「タコ部屋」にほうりこまれた詳しくは高田・古川（1981）を参照されたい。

「人夫出し飯場」は町中につくるのが難しいので、被差別部落や在日朝鮮人集住地区に作られることが多かった。関西では伊丹空港先の中村地区や京都宇治のウトロ地区が最も大きかった。あとは土地の安い、逃亡のしにくい山の中に作られていた。

こうしたことから、多くの労働者にすれば「飯場」はまとまった金が欲しいときか、仕事のないときにいやいや入るものであった。「10 日間死んでくる」なんて発言する労働者もいた。

1980 年代のバブル経済の中で、大阪市大正区の飯場村の経営者がより大きな飯場を建てようとして、浪速区や西成区に進出しようとして地元住民の反対運動に出会う。「神明」が 1983 年に西成北津守の被差別部落地区に 200 室

規模の宿舎を建設した。それをみた「神本組」が浪速区の被差別地区に進出しようとして凄い反対運動に出会うが建設強行した。その後（1985 年以降)、生活保護者の宿舎になった。そこで「渥美組」が西成区南津守に進出しようとするが凄い反対運動に出会い断念し、旧遊郭の「飛田」に進出した（1988 年)。現在では地区内に 7 棟 400 室。1989 年には「陸陽」という業者が堺に進出しようとして反対運動に出会い、断念した。

その後、神明も渥美も愛知万博、中部空港工事を狙って名古屋に進出し、大型飯場を建設した。そして共に東京進出。東北大震災では即座に仙台に飯場建設と続く。

1980 年代のバブル経済の時大量の外国人労働者（30 万人）が働いていた。交通の便の言い高田馬場はもともと日本人の労働者の寄せ場だったが、近くのドヤ街の新大久保は小さいので、電車で通ってくる労働者が多かった。そこで外国人の労働者が激増し、早朝は駅周辺にあふれていたが、権力は黙認していた。彼らのほとんどが「無資格」だったので、大量に集中して住むと摘発されやすい。それで分散して隠れていたので、宿舎はとてもひどかったようだが宿舎問題は見えにくかった。そして、バブルが崩壊すると、「不法滞在」として「排除」された。

関東では飯場の多くが暴力団経営で、あまり大きくなく、むしろ宿舎問題は、東北の出稼ぎ労働者組合が積極的に取り組んでいた。暴力団の飯場にはあまり手を付けていないようである。しかし、火事が起こると多くの労働者が飯場で死ぬので、そのときだけ宿舎問題がクローズアップされていたようである。

関西のような飯場村や在日コリアンの関与が少なかったと思われる。したがって、神奈川の林間グループや千葉の光営、地商の存在が大きいのであろう。今、「暴対法」も出来てゼネコンは暴力団がらみの業者は使わない。ここに新規の業者や関西の業者が進出する余地が出来たと思われる。

それ以上に、山谷という寄せ場が労働市場として機能しにくくなったことと、派遣法の登場で大きく関係していると思う。

３．寄せ場の変遷とドヤ街の変遷

大きなドヤ街に労働者を求人にくる業者が集まり寄せ場が形成される。戦後はドヤ街のないところは、日雇いの職安前とか「日通」の前というのが全国に共通した寄せ場だった。「日通」は「国鉄（現 JR）」の荷物の積み込み積み下ろしを一手に引き受け毎日大量の日雇いを雇っていた。だから全国の「日通」の前が寄せ場になっていた。同じように、大量の労働者を必要とする港湾も寄せ場を作っていた。

職安の前が寄せ場となったのは、正規の紹介をうけるには日雇雇用保険手帳をもたなければならないが、この手帳は住民票がいる。訳があって住民票が取れない人は職安から仕事にいけない。それを狙って訳あり業者が求人にくる。この業者も職安に登録できない業者が多かった。そして、職安の仕事はいろんな保険や年金も天引きされるため、手取りが安くなるのに対して、訳あり業者は保険など何もないので、天引きが無い、その分手取りが多くなる。したがって、全国の職安の前に寄せ場が出来た。釜ヶ崎では新今宮周辺の寄せ場の方が三角公園近くの職安より労働者が数倍も多かった。これをなんとか管理しようとして、巨大なあいりん総合センターが建てられた。

日雇雇用保険手帳（通称白手帳）は住民票がいるのに、ドヤの宿泊証明だけで良いとし、求人業者が雇用保険印紙を持っていないので、労働者が書いた「自主申告書」で働いたこととする大幅な法律無視の特例をつくって、労働者を登録させ、雇用保険金をばらまいて労働者をあいりん職安に引き寄せた。これには、大阪府警が府議会で「暴動対策は警察だけでは無理だ」と発言したり、大阪府議会議員に全港湾労組の山本敬一氏がいたりしたことが実に大きい。最盛期には２万５千人も登録していた。このため大阪市内の「天六」「千鳥橋」などの寄せ場が消滅した。その後尼崎の出屋敷や神戸・新開地、京都・内浜（東七条）も消滅。内浜はどやも消滅した。

地方のドヤ街・寄せ場の多くは戦後、どさくさまぎれに建てられた不法占拠地帯が多かった。

1973 年のオイルショックの後、私は九州のドヤ街めぐりをした。九州大学の寮に泊まり込み、博多の寄せ場が「築港」と聞き、行ってみるとそのすぐ

そばにドヤ街があった。川の上に小さなドヤが並んでいた。その後、熊本に行き、熊本大学の寮に泊まり寄せ場を探した。職安前が寄せ場であった。ドヤは、河川敷の中に一軒だけあったがまわりは立ち退いた後で、有刺鉄線が張られていた。職安前では高所作業の声がかかり、電電公社（現 NTT）の鉄塔の上でのアンテナの付け替えであった。安全帯も防護ネットもない現場で、ドライバーを落としたらはねて飛んで行ってビックリした。私を雇った業者は水俣ではアパートを借り、熊本では普通の旅館住まいだった。この業者とはその後水俣、徳島、宇都宮と渡り歩き、ブラジルに行く話も出たが、前科もちの私はパスポートが出ないと思い込み、断った。

その後博多のドヤ街を見に行ったが、きれいさっぱり無くなり、聞くと九州大学医学部裏にあるというので行くと、そこは在日コリアン集住地区だった。熊本の河川敷もなくなっていた。博多の駅前にもドヤ街があったがだいぶ前に無くなった。

伊丹の飯場村も戦前の空港建設の飯場地帯だったので、国有地を占拠していた。結局たちのかされ、ばらばらになった。宇治のウトロは民有地だったので随分時間がかかったが、立ち退きではなく、土地を私有地化し公営住宅建設へと進んだ。なお、伊丹でもウトロでも国土交通大臣が公明党だったことが大きく影響していると言われている。これは在日コリアンに創価学会員が多いことと関係があるのであろう。

名古屋の笹島ドヤ街は、駅前一等地で火事をきっかけに再開発され、きれいに無くなった。ドヤは駅西にパラパラと点在するが、ドヤ街とは言えない。東京も戦前最大のドヤ街「高橋」（江東区森下）はビジネスホテル街となり、残った一軒のドヤは区のホームレス対策宿泊施設に利用されていた。ここは日雇い職安があったが。港湾労働が合理化され仕事が無くなり廃止され、寄せ場としても完全に無くなった。川崎も寄せ場は港湾労働が主体だったので、なくなったが、ドヤ街は生活保護受給者宿として残っている。横浜・寿町も高齢単身者のドヤ街として残っているが、寄せ場としてはあまり機能していないようである。

1960 年前後の炭鉱合理化、閉山の中で多くの労働者がドヤ街に流れ込み、製造業、運送業、建設業、港湾労働に従事し、ドヤ街が寄せ場になった。行

政も寄せ場に職安の労働出張所をつくった。しかし、釜ヶ崎の例でもわかるように、路上求人、闇求人はなくならかった。

職安は輪番紹介なので業者に労働者を選ぶことができない。指名という方法もあるが、労働組合はこれをきらった。その結果、手配師が職安前の路上で労働者を選ぶ。釜ヶ崎の場合は職安が駅から遠いので、新今宮駅そばの霞町周辺路上が寄せ場になった。これをなんとか管理するため 1962 年に西成労働福祉センターがつくられ、1970 年にあいりん総合センターがつくられた。

あいりん総合センターの当初は真ん中を製造業の大手が大型バスを乗り付け求人していた。新日鉄、日立造船、大阪ガス、三井東圧など。ここに全港湾労組が組合を作り出したところでオイルショック（1973 年）がおこる。製造業は合理化と組合対策で一斉に釜ヶ崎から姿を消した。港湾労働はまだ合理化がすすまず、釜ヶ崎労働者に依存していた。神戸からも求人がきていた。ここに中学を卒業して自衛隊に入った若者が流入する。自衛隊に入れば免許がとれるが、幹部になる人間以外は入れ替えがおこなわれる。20 前後の学歴が中卒の若者の受け皿はどこも労働条件が悪い。彼らが、全港湾労組を飛び出し暴力団と闘おうとした「釜ヶ崎共闘会議（釜共闘）」に流れ込んだ。ずっと後に作られる、特別清掃事業の地域外の運転手にもこの自衛隊あがりが多かった。

全港湾労組の日雇い対策として「青手帳制度」が作られ、釜ヶ崎労働者の労働者もかなりの人間が登録していた。運送業の日通や引っ越しのサカイもよく求人にきていた。

港湾労働は山口組を始めとする暴力団の資金源でも有ったので、合理化が強力にすすめられた。コンテナとそれを積むラッシュ船が作られ、どんどん労働者がいらなくなり、ついには青手帳も廃止された（1988 年）。

こうして製造業、運送業、港湾労働が寄せ場からなくなり、建設業だけになった。

その建設業の仕事も寄せ場の減少、出稼ぎ労働者の消滅の中、インターネットの普及で大変化している。携帯電話の普及が日雇い労働者にも及び、寄せ場を経由しない手配が急拡大している。私は携帯電話が持てない労働者が寄せ場に集まってくると思ったが、そうはならなかった。仕事のできる労働

者には業者が携帯を渡して囲いこみ、他方は宿舎=飯場に囲い込んで寄せ場に行かないようにしている。求人もスポーツ新聞から求人情報誌、インターネットへと変化している。

こうなると、寄せ場は釜ヶ崎だけになるであろう。だが、釜ヶ崎のドヤもインバウンドの外国人がどんどん入り込み、労働者向けのドヤがなくなりかねない。釜ヶ崎もジェントリフィケーションのような現象がみられるようになって、安いドヤがどんどん減少している。しかし、全国を渡り歩く労働者が帰ってくるところも釜ヶ崎しかない。ドヤがある限り、釜ヶ崎は全国唯一の寄せ場として残るであろう。

４．登録型派遣の登場

寄せ場からの手配が激減したことと、登録型派遣は大きく関係している。製造業の登録型派遣の派遣先はあいりん総合センターのところでも述べたが、昔から下請けの会社に労働者を手配する業者はいた。八幡の労働下宿はその典型だが、製造業の労務管理の近代化の中で、機械化と下請け整理が進み、本工は激減した。現場で働く労働者はいつでも首が切れる下請け会社に雇われていたがその社員も減らされた。それが派遣法の改悪（1999 年）で製造業にも派遣が許可され、更にインターネットの普及で、登録型派遣が登場（2005 年）。これが日雇い派遣を生み出した。資本の側からしたら、これほど便利のいいものはない。景気の変動に合わせていつでも労働者の数を調整できる。

しかし、ここに労働組合が登場してくる。グッドウイルやフルキャストのユニオンができるが、そこにリーマンショックが起こる（2008 年）。大量の派遣労働者が寮を追い出され、大きな社会問題となり、「派遣村」が登場するまでエスカレートした。国は寮費を補助してもいた。それが今では労働者不足で、6 ヵ月寮費無料なんていう求人広告もみるようになった。製造業の寮は建設業の寮と違い食事はつかなかった。自炊か外食という選択肢しかない。それが食事つきの寮もでてきた。

建設業と港湾運送業と警備業は派遣が禁止されているが、そこに、派遣業者が入り込み始めている。建設でも、荷揚げとか積み下ろしとかの運送業を装って建設現場に入り込み、職人の手元をさせている。寄せ場から求人されると手元でも1万円のところが派遣なら8,000円しかもらえない。したがって、建設業に派遣している業者は釜ヶ崎には求人に来ず、天王寺に事務所を構えている。その数14ヵ所。全部ネットか事務所で登録し、電話やネットで手配するので朝は事務所に集まらない。銀行口座のもてない人間だけが夕方支払いを待って、事務所周辺にたむろしているだけである。

これが、東京では当たり前になっている。職安での日雇い雇用保険の支払いも銀行振り込みが主流になり、朝の失業認定と手帳返還にしか労働者集まらず、その数もどんどん減っている。

5．一人親方と個人事業主

2018年4月から、建設業で社会保険のない会社は排除され、労働者も保険加入が問われ、日雇雇用保険や健康保険がどうなるか大混乱がおきた。あいりん総合センターに出入りする業者は日雇雇用保険に入っていたが、小さな業者ははいってなく、それ以上にゼネコンから社員化を強要され、社員になれない人は一人親方になれと言われた。日雇の否定だ。今までも大工などでは一人親方が多く、全建総連が組織し、保険もつくってきたが、日雇保険に比べると保険料がとても高い（全建総連の労災保険加入者は2014年で42万4千人）。どのぐらいの人間が社員になり、どのぐらいの人間が一人親方になったのかまだきちんとした数字がでていない。

ウーバーが出前の配達人手配を始めた。アメリカではこの人たちを「ギグ（日雇い経済）」と呼び、個人事業主としている。彼らの中から労働者として認めろという主張に法律が否定的という報道をみた。日本の建設業の一人親方とおなじものを感じる。請負という形で労働者ではない、というのは資本にとって都合の良い雇い方で、しごとがへったときにすぐ「契約終了」として首を切れる。日雇労働者がこういう名称に変えられると実態がますます見

えにくくなる。ちなみに 2018 年の個人業務請負人は 170 万人といわれている。このうちどのぐらいが労働者なのかはまったくわからない。
国交省も規制逃れの一人親方の調査を始めた。
　請負型労働の最先端のウーバーイーツは働き手が集まる場所がない、登録のための事務所はあるが、アマゾンのような配送センターはない。そのため働き手同士の交流はネットの上にしかない。労働条件交渉も難しい。アメリカやイギリスでは労働者の権利を認めるような判決もでているが、日本ではそれが未だにない状態である。寄せ場が無ければ労働者が団結することができない。

６．釜ヶ崎は寄せ場として残るであろうか？

　「寄せ場」の条件はなんだろう？以下のとおりで整理する。
①日雇いの仕事があること。
②ドヤ（簡易宿泊所）があること。
③シェルター（無料宿泊所）があること。
④炊き出しがあること。
　③と④が無いと日雇いの補充が実に難しい。最初から日雇いの仕事をしようと思ってくる人は少ない。いろんな事情があり、仕事を失い、住居を失い金のない人はシェルターや炊き出しを求めて集まってくる。そして、体力がつき、気力が付けば、お金のため働きだす。こうして日雇い労働者が出来上がる。中には日雇いから卒業して出ていく人もいる。釜ヶ崎はこうして昔から日雇い労働者をあつめてきた。釜ヶ崎は仕事もドヤもシェルターも炊き出しもある。これがある限り規模は小さくなっても寄せ場として釜ヶ崎は残るであろう。
　東京では、炊き出しをやらせない動きがあり、シェルターも固定せず、5 年ごとに移動する政策をとっている。貧乏人や外国人の集住地区を作らせないのが東京の昔からの都市政策であるといえる。同和地区も移動を繰り返して無いことにした。チャイナタウンは横浜、コリアタウンは川崎。それなのに新大久保にコリアタウンができそうになり、「在特会」を使って排除しよう

としたが、失敗した。そして、今池袋がチャイナタウン化しようとしている。ここを排除しても埼玉県に移動するだけである。住居と仕事を求めて外国人は集住する。関東では新しい寄せ場はこういうところにできるであろう。

【参考文献】

高田玉吉記・古川善盛編（1981）『土工玉吉：タコ部屋半生記』太平出版社。